

途上国アルバム：訪問した14か国

山岡 和純

研究コーディネーター

独立行政法人国際農林水産業研究センター

私は2010年4月より現在まで、当センターの研究戦略室で研究コーディネーターとして、足かけ4年8か月間お世話になっています。その間に出向いた海外出張は計28回にのぼり、日数では延べ250日間、訪問・滞在した国数は延べ36か国、重複を排除しますと19か国、このうち途上国は14か国になります。今回の途上国アルバムは、従来のものから少し趣向を変えて、2010年4月より現在までに訪問したこの途上国14ヶ国を訪問順にそれぞれ3枚程度の写真でご紹介することと致します。

1. ケニア（2010年5月、2014年2月）



赤道直下のケニアは稲作のイメージと結びつかない国の一つですが、首都ナイロビの近郊のJICAプロジェクト「ムエア（Mwea）地区」では、水田稲作地帯に農業用水路等の灌漑施設を開設し、パイロットファームを設けて日本の経験を活かした水管理や営農手法の技術移転などを進めました。その結果、現在は約9,000haの灌漑水田でケニア全体の8割を占める年間約6万トンのコメを生産し、アフリカを代表する水田地帯となっています。市場での売値が高いため農民はアジア種インディカ米のバスマティ・ライスの作付けを好んで拡大しています。首都ナイロビは赤道直下にありながら標高が1500m前後と高く、平均気温が20℃前後と涼しく、多くの国際機関が立地する近代都市ですが、名物でもある朝夕の道路の渋滞は半端ではなく、筆者の到着時にはスクールで主要道路が一瞬にして川に変身し、空港から通常一時間程度の道のりに三時間半かかりました。

2. タンザニア（2010年5月）



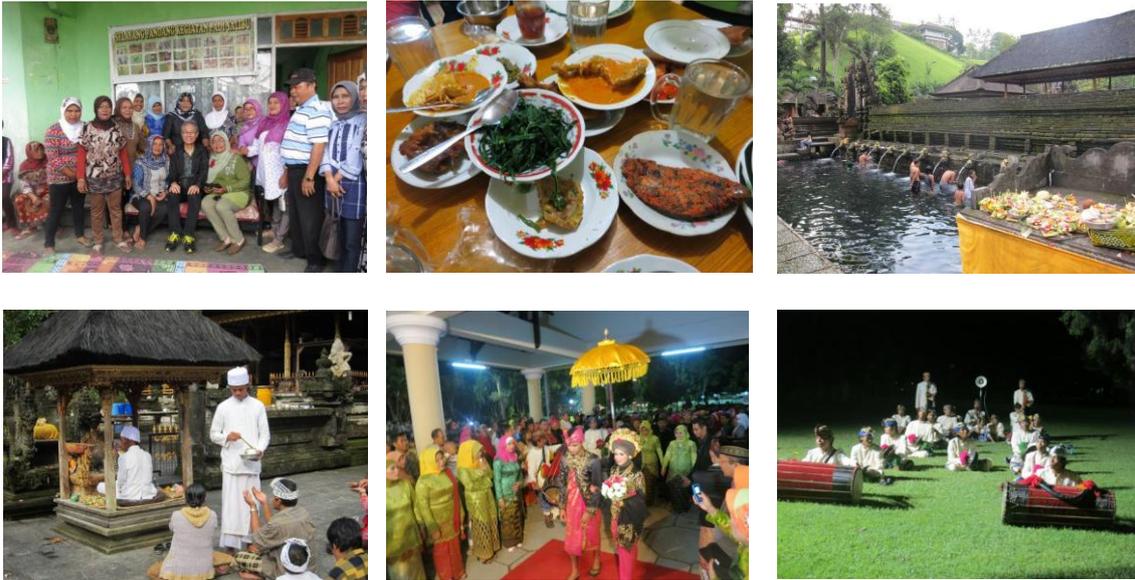
キリマンジャロコーヒーで有名なタンザニアは、サブサハラアフリカ 49 か国中第 3 位、年間 200 万トン以上のコメを生産し消費しているコメ大国です。キリマンジャロ山南麓のローア・モシ (Lower Moshi) 地区は、わが国が 1970 年代から 20 年以上にわたり農業開発協力を展開し、灌漑農業を普及し高収量品種による稲作が広まりました。タンザニアは GNP の約 50%、労働人口の約 8 割が農業に従事する農業国で、キリマンジャロ農業開発センター (KADC) の設立及び有償資金協力によるローア・モシ農業灌漑事業で 1,100ha の灌漑施設が建設されたことは、同国のマクロ経済にも大きなインパクトを与えたものと考えられます。地元の人たちに「恥ずかしがり屋のキリマンジャロ」と呼ばれる、標高 5,895m アフリカ大陸の最高峰は常に雲を纏い、その頂は雲に隠れて姿を見せません。筆者がローア・モシ地区を訪れた日には、偶然にも、わずかな時間だけその白く輝く美しい姿を見せてくれました。

3. ガーナ (2010 年 5 月、2011 年 2 月)



ガーナと言えばチョコレートとカカオ豆ですが、年間に 50 万トンのコメ生産量を誇りサブサハラアフリカ諸国のベスト 10 にランクインする稲作国でもあります。炊いたコメを油と混ぜて味付けしたジョロフ・ライス (Jollof rice) は、チャーハンやピラフともまた少し違った味わいで日本人の好みにも良く合います。その語源は「ウォロフ族の飯」に由来するといわれ、かつてのウォロフ帝国で生まれた歴史のある伝統料理です。刻んだ牛肉や鶏肉を塩、胡椒、ニンニクで下味を付け、ココナッツオイルを熱した深鍋で炒めてから玉葱のみじん切りとトマト、トマトピューレを加えてさらに炒め、最後に鍋に水を注ぎ、ナス、キャベツ、ニンジンなどの野菜とナツメグ、ショウガ、クミン、トウガラシなどの香辛料を適宜加えて煮込みます。鍋に残った煮汁で米を炊き、炊き上がった飯を皿に盛り付け、取り分けた具を添えます。北部のサバンナ地帯の農村では、通常家長とその兄弟の所帯 4 家族が 1 戸の住居で共同生活を行い、家長については一夫多妻制 (妻は通常 2~3 人) で、他の共同生活メンバーは結婚しても家 (戸) を出て独立することは許されず、大人の男性は家長が所有し管理する共同農地を耕作するほか、個人で所有する農地も耕作します。ここではコメはハレの日だけにだけ口にできる高級食材です。この地域に自生し、栽培もされているシアバターは、食用や薬として用いられるほか石鹸やクリームなどにも配合され、収穫から加工までを担う女性たちの重要な現金収入源です。村には電気・ガス・水道はなく、村はずれの道路沿いの一角で燃料となる薪と炭が販売されていました。

4. インドネシア (2010年10月、2011年12月、2012年2月、10月、2013年2月、2014年1月、9月)



インドネシアには7回訪問し、ジャワ島のジャカルタ、ボゴール、ソロ、ジョグジャカルタ、バリ島、ロンボク島、スラウェシ島のマカッサル、スマトラ島のパダンとその近郊に足を延ばしました。スマトラ島西スマトラ州都パダンと近郊都市ブキティンギの間に位置するパダン・パンジャン村の東方で、SALIBU 農法という新しく発見された特殊なヒコバエ (ratoon) 農法を実践している村を訪れ、話を聞きました。栽培法に工夫を凝らすことで毎回5.5~7.5t/haの収量を上げることができ、かつ、稲株の移植から100日間程度で収穫できるため、2年間で7作(7回の収穫)が可能な農法です。この間に連作障害等は発生せず、収量はむしろ漸増していきます。この地域では女性が経済的な主導権を握っています。バリ島には過去5回ほど訪れ、スバックという農民達の自治的な水利組織を中心に現地を調査してきましたが、土着宗教に根ざした独特の文化と風習に彩られた空間は、何度訪れても新しい発見があり色褪せません。水の神を祀る寺院では信心深い人々が沐浴や僧侶の授戒を受けている姿を見かけます。ロンボク島では地元の名士のご子息の結婚式に招かれ、屋外でのガムランの演奏などの歓待を受けました。

5. 中国 (2010年11月)



中国にも過去に北京には3回と、河南省の鄭州と三門峽、上海、四川省の成都、九寨溝

と黄龍を訪れていました。そして今回は、雲南省の省都昆明の南方約 350 k m、紅河上流域の南に位置する哀牢（アイラオ）山の南側の急斜面いっばいに拓かれている棚田の一角と、哈尼族の集落を訪れました。雲南省紅河（Honghe）哈尼（Hani）族彝（Yi）族自治州（県）の蒙自（Mengzi）县（郡）という地域です。彼らは、隋、唐の時代、7世紀ごろにこの地に移り住み、以来 1300 年間、こつこつと用水路や棚田を拓き続け、現在では広大な棚田に全部で 4,650 本もの用水路が毎年水を届けています。少数民族は、最大勢力の哈尼族のほか、彝（イー）族、ハン族、ダイ族、ミャオ族、ヤオ族、ツウワン族と、全部で 7 つの少数民族が大体標高別に住み分けて平和共存しています。人々は恵みの水をもたらす雲は、龍の化身であると信じ、一年に一回行われる収穫祭では、屋外に 200mにも及ぶテーブルを並べて食事を持ち寄り、豚などの生贄を捧げて豊作を祈願し、酒を酌み交わして収穫の喜びを分かち合う「長街宴」という風習を続けています。

6. セネガル（2010 年 12 月、2013 年 2 月）



2010 年にはダカール市で開催された FAO アフリカ地域ワークショップ “Intra-African Training and Dissemination of Technical know-how for Sustainable Agriculture and Rural Development with Africa-ASEAN Country Cooperation within the Framework of South-south Cooperation (GCP/INT/053/JPN)” に参加して情報収集すると共に、プレゼンテーションを行い、参加者に対して JIRCAS の CARD に関連する稲作研究の概要及びアジアモンスーンにおける稲作の特徴に関する情報発信を行いました。また、2012 年には同じくダカール市で開催された第 8 回アフリカ稲作振興共同体（CARD）運営委員会及び第 5 回 CARD 総会に出席しました。ダカール市内にはアフリカ大陸最西端のベルデ岬があり、大西洋に向かって突き出たアルマジと呼ばれる岬の突端には沢山の屋台が出ていて、生牡蠣の他、生ウニ、オマールや焼きエビをビールと共に頂きました。市内のレストランでは見たことのない弦楽器の流しに出会いました。ダカール郊外でも収穫後の稲わらを積む作業を見かけました。セネガルはガーナと並ぶコメの生産・消費国で、北部のモーリタニアとの国境を流れるセネガル川の沿岸は、アフリカ随一の灌漑水田稲作地帯です。セネガルで流通するおコメの特徴としては、粒がラグビーボール形状の普通のコメよりも、調理した時に味が染みやすい砕米の方が流通量も多く高く売られています。

7. エチオピア (2011年2月)



エチオピア北西部のアムハラ州中央やや西寄りに位置する青ナイル川の源流でもあるタナ湖の南岸沿いの町バハルダール市を訪れました。同市は人口約 20 万人を擁するアムハラ州の州都です。当地ではもともと畑地でのメイズや雑穀類とともに、低平地ではテフ (teff) と呼ばれるイネ科スズメガヤ属の雑穀が栽培され、稲作はほとんど行われていませんでした。テフはこの地域の主食で、粉に挽いて水に溶き、気泡の多いスポンジ状の薄いクレープのように焼いたインジェラと呼ばれる食品の原材料となります。これは発酵食品で、独特の香りと酸味があり、適当な大きさに千切りし、ドロワット (鳥の唐辛煮)、クットフォ (生挽き肉の油和え)、ティブス (賽の目焼肉)、シュロワット (豆の煮込み)、アサティブス (魚の唐揚げ) などを巻き込んで食します。

近年、この地域でコメの生産が盛んになってきていますが、炊いて食べるのではなく、やはり粉に挽いてテフの粉と混ぜてインジェラを作ります。米粉が入ったインジェラは色が白く高級品とされているようです。市内の市場では様々な穀物や食品が売買され、活気がありました。また、首都アジスアベバの南東約 100km のアフリカ大地溝帯の中にあるオロミア州のナズレット市 (現地オロミア語ではアダマ市) 及び近郊を訪問し、畑地灌漑地区や樹園地の現地視察を行いました。標高 2350m のアジスアベバ市に対して、ナズレット市は標高 1550m と標高差が 800m ほどあり、アジスアベバ市と比較してかなり温暖な気候です。道中、ラクダの群れを操る牧童に出会いました。

8. シエラレオネ (2011年2月)



第 5 回 CARD (アフリカ稲作振興のための共同体) 運営委員会に参加するため、シエラレオネ国フリータウン市を訪れました。この国はなかなか訪れる機会のない国の一つで、現在はエボラ出血熱の感染拡大のため渡航の是非を検討するよう外務省から感染症危険

情報がでています。空港からフリータウン市街までは、河口幅が 5km もある河口デルタ地帯を迂回して陸路でアプローチすると 3 時間以上かかるので、この河口を横断する乗合船に乗船しました。ところが引き潮で船が棧橋に横付けできず、船は棧橋から 10m ほど離れて碇泊しています。どうやって船に乗り込むのかと考えていたら、屈強そうな男が近づいてきて、棧橋から水に濡れないように荷物だけでなく乗客も男に「お姫様抱っこ」で抱えられて乗船しました。対岸にはほんの 20 分ほどで渡れましたが、乗船待ち時間と市街の渋滞、車両の故障等で結局移動に 4 時間以上要しました。フリータウンの北方、陸路で 150km ほどのギニア国境近くのカンビア県マンボロ市等の稲作地帯を視察した際には、収穫した稲の粃を脱穀せずにそのままドラム缶で茹でて水を入れて冷やし、一晩寝かせて翌日それを蒸して水気を飛ばした後に床に敷き均して 1~2 日間天日干し乾燥させるパーボイルド・ライスの加工の様子を見ることができました。パーボイルド・ライスは粃の状態のままコメのでんぷんを糊化することで、コメ粒の硬化を促進し乾燥による胴割れやとう精による碎米の発生を抑制し、胚芽や糠層から白米部分への栄養分の移行を促すほか、粃殻の剥離性を高め粃摺り作業を容易にし、硬化したコメ粒への昆虫による食害を軽減し、炊飯中に多量の水分を吸って炊き上がり量が増え、満腹感も得られやすいとのことでした。

9. イラン (2011 年 10 月)



国際灌漑排水委員会 (ICID) 第 21 回総会及び第 62 回国際執行理事会とその関連会議に参加するため、イランのテヘランを訪れました。ここではまず空港の入国審査で、日本は米国の同盟国だという理由で、日本人だけ(しかも全員ではなくランダムに抽出して)別室に連れて行かれて、時間を掛けて指紋を採られるなどの嫌がらせを受けました。また、北部のカスピ海沿岸に広がるゴレスタン州内に 40 ある灌漑地区の一つであるタザ・アバッド灌漑地区を訪れて現地を視察しました。乾燥気候のテヘランから山一つ越えたゴレスタン州は降水が豊富で、水田地帯が広がっていました。テヘラン市内で見つけた KFC ならぬ SFC というフライドチキンのお店は、中味はケンタッキー・フライドチキンと全く一緒ですが、米国の名前であるケンタッキーという名称を使わずに、スペシャル・フライドチキンと称していました。従業員の女性達は全員黒ずくめの衣装とスカーフを着用していました。私が宿泊したホテルのフロントで働く女性達も同様でした。空港のトイレの個室の中を覗くと、何故か大・小用の便器が二つ付いていました。

10. ウガンダ (2011年11月)



ウガンダは、近年コメの作付けが急増した国の一つで、2002年から2008年までで作付面積が6,000ha (1,500ha) から50,000ha (40,000ha) に拡大しています(括弧内は陸稲で内数)。これによりコメの輸入は2005年の6万トンから2007年の4万トンに減少し、3千万ドルを節減できたとのこと。1988年以前はわずか2万トン程度であったコメ生産量は、2010年には230,689トンに達しました。ウガンダはアフリカの一般的なイメージを裏切るようなとても緑豊かな景観が特徴で、特にヴィクトリア湖の沿岸のエンテベ市にはリゾートホテルもあり、質の高いサービスが提供されています。首都カンパラも緑が豊かで、主要道路は車道と歩道が分離し、あちらこちらで制服を着た小学生～中学生を見かけました。途上国の街中ではよく見る風景ですが、まだ二階が建築途中で将来は三階も建て増しを予定しているような建物の一階でスーパーマーケットが堂々と営業していました。

11. カメルーン (2012年11月)



第7回CARD運営委員会への出席と、カメルーン国農業開発研究所に訪問してイネ部門の研究の実情に関して意見交換すると共に、農業農村開発省(MINADER)の農村土木・農村生活環境改善部を訪問して同国の灌漑の実情について情報収集しました。さらに、ヤウンデ市から南方へ車で2時間半ほど走った地域で、JICAの陸稲稲作開発プロジェクト(PRODERiP)で実施している陸稲の種子増殖ほ場を訪問し、周辺の現地を視察しました。首都のヤウンデでは英語とフランス語が併記されていることが多く、言葉も英語と仏語の両方が通用していました。仏語圏の諸国によく見られるように、レストランなどでの食べ物は洗練されていて美味でした。郊外を車で走る間にあちらこちらで青空市場を見かけました。熱帯雨林をかき分けて進むと突然に写真のような陸稲のほ場が現れるのには驚かされました。

1 2. トルコ (2013 年 9 月)



マルディン市で開催された第 1 回世界灌漑フォーラム (WIF1)、国際灌漑排水委員会 (ICID) 第 64 回国際執行理事会 (IEC) 及び関連会議に出席するため、イスタンブール経由で内戦状態の砲弾が飛び交うシリアとの国境から僅か 30km 足らずの当地を訪問しました。イスタンブールでは夜市に大勢の人が出て賑わっていました。アジアとヨーロッパを隔てているボスポラス海峡の夜景は、とてもエキゾチックな感じがしました。イスタンブールには 2009 年の第 5 回世界水フォーラム (WWF5) の際にも訪れており、ブルーモスクや地下宮殿をはじめとする市内の観光名所はほとんど訪問済みでした。トルコの国内便に初めて乗りましたが、飲み物や食事をサービスする客室乗務員の男性の出で立ちがコックさんのような白いユニフォームで、つい見とれてしまいました。

1 3. ハンガリー (2013 年 10 月)



世界水会議 (WWC) メンバーズミーティング及び第 50 回理事会、並びにブダペスト世界水サミット (BWS) に出席するため、ブダペスト市を訪れました。同市には、在オランダ日本国大使館に勤務していた 20 年ほど前に、家族旅行で一度訪れています。その時は精細な手描きの食器で有名なヘレンド村まで脚を伸ばしています。ブダペストはダニューブ (ドナウ) 川を隔てて両岸に発展したブダとペストという二つの街が合併してできたハンガリーの首都です。その美しい町並みと川に何本も架かる美しい橋梁が印象的で、また、美食の町としても知られています。WWC の理事会は、当地のハンガリー・アカデミー協会の由緒ある建物の大ホールで開催され、また、歓迎レセプションはアダー大統領がホストを務め、3 時間を超える会食を最初から最後まで同席するという歓待ぶりでした。フォアグラの産地といえは世界の生産量の 6 割を占めるフランス南西部のペリゴール地方 (ドルドーニュ県とランド県) が有名ですが、ハンガリーはフランスに次ぐ生産

国で世界の1割弱を生産しています。しかし実は、フォアグラ（肝臓）を取る前のガチョウやアヒルを数週間フランスで飼育するとフランス産と表示でき、フランス産と記されたフォアグラの半分以上がハンガリーで飼育されたことのあるガチョウやアヒルであるといわれています。

14. メキシコ（2014年6月）



第52回世界水会議（WWC）理事会及びラテンアメリカ水週間2014に出席するため、メキシコシティを訪れました。同市への訪問も、第4回世界水フォーラム（WWF4）以来、二回目です。WWC理事会は、初日の会場は一般のホテルでしたが、二日目はエンリケ・ペーニャ・ニエト・メキシコ大統領公邸の大ホールに会場を移し、このときの同大統領の挨拶の様子は、翌日の朝刊一面トップ記事となりました。郊外の世界遺産ティオテウワカンには、インドネシア・ジョグジャカルタのボロブドゥールと同様に、密林に覆われていて長年その存在が自然の力によって隠されていましたが、当地を通る鉄道の駅を開発する計画により、自然の山だと思われていたものが石造のピラミッドであったことが発見されたというものです。メキシコはサボテンのイメージが強い国ですが、この国の地酒であるテキーラは、アフリカ原産のアロエを巨大化したような竜舌蘭の一種、アガベから作られます。メキシコシティの市の周辺部では、山肌にへばり付くような町並みが印象的でした。

以上、14ヶ国を駆け足でご紹介致しました。より詳しい内容をお聞きになりたい方は筆者（kyamaoka@affrc.go.jp）までご遠慮なくお尋ねください。